

牧野富太郎を 敬愛する詩人 尾崎喜八

加藤良一 令和4年(2022)3月31日



詩人で、随筆や翻訳も手掛けた**尾崎喜八**は、植物学者**牧野富太郎**の生き方や業績を高く評価し、敬愛していた。喜八自身も山歩きが好きで、家族揃って気象観測、花の栽培、昆虫や植物の観察と標本づくりなどの自然観察にも熱中していたという。さらに、東京の郊外で半農生活を営んだりもしている。

□ 尾崎喜八は、明治25年(1892)、東京府東京市京橋区(現東京都中央区京橋)で、尾崎喜三郎の長男として生まれた。生後まもなく両親が離婚、東京府下荏原郡の漁師の家に里子に出された。その後、4歳のときに京橋区本港町で廻漕問屋を営む実家にひきとられた。明治42年(1909)3月、商業学校を卒業後、銀行に就職。その頃から文学に親しむようになり、ヨーロッパ文学を読耽るようになる。『文章世界』、『スバル』などで高村光太郎を知り、その盛んな芸術意欲と反逆精神に触れる。

尾崎喜八は、詩や散文に山岳と自然を主題とした優れた作品を多く残している。戦後の7年間、長野県に住み、代表作である詩集『**花咲ける孤独**』を書いた。長野県の自然への愛着は強く、県下の多くの小中学校、高校の校歌の作詞を手掛けてもいる。

いっぽう、クラシック音楽への造詣も深く、晩年の昭和48年(1973)には、音楽随筆集『**音楽への愛と感謝**』を残している。この随筆集の詳細については別の機会にゆずるが、「幼くして歌というものを教えられ以来、更に長じてロマン・ロランの書くものに親しんで以来、音楽は私から離れなかった。その美は私を喜ばせ、鼓舞し、慰め、また時に私を鞭撻しつつ精神を高揚させた。私の詩や文章、つまり今日までの私の仕事は、すべて音楽(それに自然)から養われたものだと言える。」と、音楽との濃密なかかわりをあとがきに残している。

□ 男声合唱に関りのある方ならご存じと思うが、作曲家**多田武彦**は6曲からなる男声合唱組曲『**尾崎喜八の詩から**』に代表されるように尾崎喜八の詩に好んで作曲している。

『尾崎喜八の詩から』

I 冬野	詩集「花咲ける孤独」より
II 最後の雪に	詩集「高層雲の下」より
III 春愁	詩帖から
IV 天上沢	詩集「旅と滞在」より
V <small>まきば</small> 牧場	詩集「高原詩抄」より
VI かけす	詩集「花咲ける孤独」より

この曲集には、「第二」、「第三」と続編がある。尾崎喜八のいくつかの詩集から、それぞれの曲集に合った詩を選び抜いてひとつのまとまりのある形に再構築している。多田武彦は、組曲の目的に合った詩を探し出すことに優れていたといわれている。生前、そのことについてお聞きする機会があったとき、「これは、と思った詩を読んでいると自然にメロディが浮かんでくる」と仰っていた。

□ 牧野富太郎と尾崎喜八の出会い、昭和5年(1930)、尾崎喜八が東京植物同好会主催の植物採集会について報知新聞に連載した記事の切り抜きを牧野富太郎が受け取ったことだった。そこには「深く敬愛する先生」と記されていた。牧野は、このことを「牧野植物随筆」で紹介している。

佳い秋の日曜日。新宿停車場の玄関を、まだすがすがしく斜に照らしている朝の太陽。そこを支配する雑踏の中の時間の秩序。着車、発車。井戸の底から出て来るような拡声器の声。しかし中村屋の店先へ並んで、セザンヌの『永遠のビスケット』を想わせる好ましい棒パンや、出来立ての白いフランスパンをにらみながら、容易に自分の注文が聴かれないので、人がそろそろ苛立つ時刻……『君、そのコッペを一本。それからバタの小さいのを一つ。急いで呉れたまえ！』

出たり入ったりする乗客の流れの中で、改札口〔牧野いう、鉄道局の用いているこの改札の語は甚だ悪くまったく意味をなしていない。同局の恥だ。これはよろしく検札口と改正し改善すべきものだ。改は変更するアラタメで検査するアラタメではない〕に近く、三四十人の人が一塊りになって佇んでいる。男もいれば女もいる。(中略)

しかし、僕の眼は終始先生に注がれる。『先生』。先生とは二十年このかた絶えてこの口を出なかった懐かしい言葉である。人を先生と呼ぶためには、僕に弟子の心がなくてはならぬ。僕は文学の先輩をも先生と呼んだこと事は一度もない。しかし今朝、僕は極めて自然に、喜びをもって、『熱情』をもってさえこの言葉を発音する。牧野富太郎先生は、右左からの皆の挨拶に、にこにこしながら応えて居られる。(中略)

僕は先生の強くて優しい眼を見る。力ある鼻翼を持った近世の取れた花を見る。あのしっかりと張った頭、あれは土佐の人の頭だ。一瞬間、僕の眼の前に、せんだんの並木を風の渡る高知県佐川の町が現われる。そこの落ち着いた古い家並や、青山文庫の閲覧室や、仁淀川から立昇る夏の昼間の水煙に、銀色に霞すんだ緑の山々が見える。

先生の刻苦奮闘の生涯については、今更こで僕がおさらいするまでもない。御用学者やアカデミーの鉄壁に対抗して、あくまでも独立不羈であった先生の残酷な苦惨の生活と、その中から生れた植物分類学上の偉大な業績。それも僕が改めていうまでもない。更に、一国の宝ともいうべきこの学者を遇するに、一小属吏にも及ばぬものを以てする国家の無関心についてもこではいうまい。今はただ心からの親愛と尊敬の念を以て先生を見る。(後略)

尾崎喜八のこの記事を読めば、牧野富太郎を如何に心底敬愛していたかが窺い知れる。

東京植物同好会の一行は、電車で国立へ行き、広大な谷保^{やほ}の雑木林での植物採集に向かった。参加者が手に手に取ってきた植物を持ってきては牧野に質問をする。先生これはなんですか。それはサワヒヨドリ、フジバカマと違う。先生こちらは何と申しますか。これはヤブマメ。こっちはネコハギ。ひっきりなしにも係わらず、立ちどころに説明を加える。しかも心からの好意をもってである。

その日一日先生と歩きながら僕が経験した数々のその『人間』の美しさ、その人柄のエマナシオン、御別れする間際の一種の名残り惜さ。それは先生その人の存在の魅力である。これこそ先生に接した人のみが活々と記憶の中で描き得るおもかげであって、同時代者にして初めて持つ事の出来る幸である。先生はその存在によって人を薰陶するだけの力を具えて居られる。それは生きたみずみずしさであって、決して乾腊品^{けんせき}※ではない。

※ 乾腊に「けんせき」とルビを振っているが、これは後段で高山植物の「乾腊標本」^{かんせき}と出て来ることからして「かんせき」の誤りではなからうか。つまり、「腊」は、干し肉^{かんせきひん}にする、干す、乾かす、の意であるから、乾腊品とは乾燥した植物標本を指すと思われる。

それから一行は堤防を立川の方へ向かった。僕は先生と御別れして友人と国立へ引返し^{くにたち}た。ぞろぞろ続く人々にまじって先生のすがたが何時までも見える。僕はこの時ほど『師』という言葉の実感を持った事はない。あれば、それはたゞ一人ロマン・ロランに対してである。

尾崎喜八のこの記事に対して、「植物採集会をかくも美しく、かくも真実に、かくも实际的に書いた人はこれまでにはなかった。尾崎君の良心と情味と彩筆と麗句とがこもごもこの会をして光彩陸離たらしめたことを会のため同君に感謝する。」と随筆を閉じている。

[Back](#)

[虫めがねTopへ](#)

[Home](#)

[Home Pageへ](#)